

第6回国際分子病理学シンポジウム（西寧会議）

2010年8月20-21日、青海大学、中国

日本病理学会後援（生涯教育ポイントの設定）、中国病理学会後援

中国医科大学後援、青海大学後援、鹿児島大学後援

中国側会長：王 恩華（中国医科大学）
中国側副会長：賈心善（中国医科大学）
中国側副会長：格 日力（青海大学）
日本側会長：蓮井和久（連絡役、鹿児島大）

日本側 学術部門世話人
名倉宏（東北大学）
朔 敬（新潟大）
阿部正文（福島県立医科大）
秦 順一（国立成育医療センター）
長村義之（東海大）
加藤良平（山梨大）
大井章史（金沢大）
社本幹博（藤田保健衛生大、八千代病院）
堤 寛（藤田保健衛生大）
井内康輝（広島大）
菊池昌弘（福岡大）
竹屋元裕（熊本大）
佐藤榮一（鹿児島大）
蓮井和久（鹿児島大）

中国側 学術部門世話人
Xinshan Jia (Chima Med. Univ.)
Jinlong Ma (Xinjiang Med. Univ.)
Weigang Fang (Beijing Univ.)
Yulin Li (Jilin Univ.)
Daling Zhu (Harbin Med. Univ.)
Gaosheng Huang (No. 4 Military Med. Univ.)
Enhua Wang (China Med. Univ.)
Jifang Wen (Central South Univ.)
Gandi Li (Sichuan Univ.)
Jin Cui (Kumming Med. Coll.)
Jialun Wang (Shenyang Med. Coll.)
Min Su (Shantou Univ.)
Jiehua He (Zhongshan Univ.)
Yuanyi Xu (Ningxia Med. Coll.)
Maode Lai (Zhejiang Univ.)
Gang Chen (Shanghai Jiaotong Univ.)
Weixia Zhong (Shandong Tumor Hosp.)
Caili Han (Heibei Med. Univ.)
Shousong Chen (Guangzhou Military Area Wuhan Hosp.)
Jianwen Huang (Fujian Med. Univ.)

文化交流の世話人
佐藤榮一（鹿児島大）

連絡先

蓮井和久
鹿児島大学大学院医歯総合研究科感染防御学講座免疫学分野
890-8544 鹿児島市桜ヶ丘 8-25-1
TEL 099-275-5303
FAX 099-275-5305
E-mail: kazhasui@m2.kufm.kagoshima-u.ac.jp

連絡先（中国側）

賈 心善（中国医科大学）
中国医科大学病理教研室
110001 中国遼寧省沈陽市和平区北二馬路92号
電話 86-24-23256666-5312
Email ismp2010@yahoo.co.jp

公用語：英語（日本語—中国語の相互通訳が入る例外がある。）

抄録：英文 Times New Roman 12 ポイントフォントで A4 一枚に作成し、メールの貼付ファイルとして送付下さい。抄録送付 e-mail メールは、以下のメールアドレスに、第6回国際分子病理学シンポジウム宛てで、本文には、氏名、所属、連絡先（電話、Fax、E-mail）、希望の発表形式（英語での口演、英語でのポスター）を、演題の表題、発表者、所属と共に、記載して、送付下さい。

特別講演（30分前後）を希望される方は、メールの本文にその旨の記載し、同様の様式にて発表抄録を作成し、貼付ファイルとして送付下さい。

抄録等の送付先：ismp2010@yahoo.co.jp

会費：10,000円、5,000円（同伴者）

日本病理学会生涯教育ポイントは、参加証を専門医更新時に送付下さい。

第6回国際分子病理学シンポジウム報告

蓮井和久
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科健康科学専攻
感染防御学講座 免疫学分野
2010. 8. 19- 8. 21、西寧会議

2009年の研究打ち合わせの時に、シンポジウムを西寧の青海大学で、サテライト会議をチベットのラサの医学院で行う計画でスタートした日本側の準備は、チベット問題や青海省玉樹県の地震、そして、その救援に高山病の発生と云った諸々の要因があり、出発前には甘肅省舟曲県の土石流発生があり、ラサ訪問は現状では観光に限定されているとのことから、西寧でのシンポジウムのみの計画となった。

しかしながら、訪れた西寧のホテルでは、丁度、玉樹県の震災復興に貢献した人々の国レベルの表彰の会議が行なわれており、このシンポジウムはその区切り後の次ぎなる文化交流事業の始まりであるようであった。

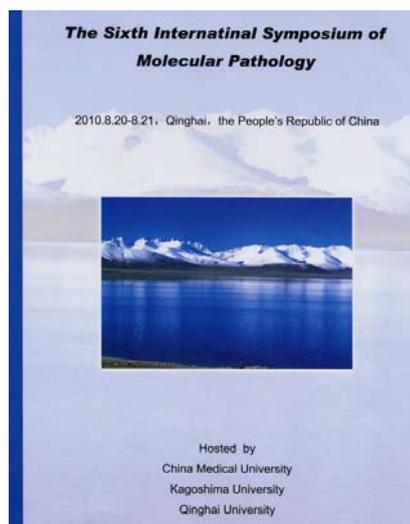
旅行の手配は、中国国際旅行社の経営不振から福岡支社の日本人スタッフが立ち上げ移動した日本国際旅行社にお願いすることになった。

このシンポジウムは、結果的には、日本病理学会、中国病理学会、中国医科大学、青海大学、鹿児島大学の（学術的）後援を得て実施された。

シンポジウムの日時は、当初は、2010年8月21日（土）であったが、西寧でのホストである格日力青海大学副学長の研究日程から、一日早く、**2010年8月20日（金）**の開催となった。しかし、この変更は天候に恵まれて、シンポジウムの日には降雨があり、それ以外は晴天であった。

従来、このシンポジウムへの旅行には、賈心善教授を友人とする敦煌会のメンバーの参加があったが、今回は全員都合がつかず、また、中国側でも、会長の王恩華教授は多くの他の学会参加と重なり、賈心善教授はカナダに在住する娘夫婦訪問等と重なり、抄録集を作成した上で、カナダに出発し、中国医科大学は韓教授(Prof. Han YC)を派遣した。

兎に角、日本側は、鹿児島から、松山隆美、佐藤榮一、奥村晃久、蓮井和久、熊本から高橋潔、金沢から上田善道、島崎都らの総勢10名が参加することになった。



出発、日本側結団式

結団式 2010年8月18日、9時過ぎの新幹線で福岡に向かい、タクシーで福岡空港国際線ターミナルに行った。ここで、旅行社の中村清吾氏と会い、今回の福岡—北京—西寧の飛行機のeチケットを受け取った。しかし、現在は、パスポートナンバーにて航空券の予約が行われており、余りeチケットの提示を求められることはないそうである。中村清吾氏も一日遅れで、内モンゴルを旅行するスルーガイドとして中国に出発するそうで、帰路の北京のホテルが重なるのとことであつた。熊本からの高橋潔教授とお孫さんと合流し、15:10発のCA954便（大連経由）で18:20到北京国際空港に到着した。大連での入国手続きはスムーズに行き、このルートも便利だなと思つた。到着ロビーで旅行社のガイドのタンさんと合流し、空港近くの北京国都大飯店に向かった。ホテルレストランにて、金沢から関西空港経由で到着した上田善道教授らと合流し、夕食を共にして、日本側、総勢10名の結団式を行った。



西寧到着、博物館、タール寺、高山医学研究所表敬訪問、シンポジウム前会議

8月19日は、5時半に起床し、ホテルでの朝食を済ませ、北京空港に向かった。7:20発のCA1207便で、9:50に西寧空港に到着した。到着ロビーで、格日力青海大学副学長夫妻のハタの出迎えを受けた。

格日力副学長の先導で**西寧博物館**を訪ねた。ここは、トヨタ系の小島プレス工業⑭の会長・小島鎌次郎氏の資金援助により整備され、その広場は桜広場



と呼ばれている。博物館を見て、西寧の産業が歴史的にタン

ガと仏像製作であり、青海湖サイクルレースが青海省の一大イベントであることが理解出来た。

昼食後に、チベット仏教のゲルク派の8つの仏塔で有名な**タール寺**を訪ねた。

このゲルク派はツォンカバが起こした宗派で、後に、この宗派の高僧がモンゴル族のアルタン・ハンからダライ・ラマの称号を受け、ダライ・ラマ5世がラサに政宗一致の政権を17世紀に樹立している。タール寺は、そのゲルク派の2番目の位置するお寺で、8つの仏塔の一つは他宗教や他宗派を抑えたことの記念の意味があるようで、



宗教間や宗派間の抗争は昔からのものであるようだ。

格日力副学長の知人のモンゴル僧の紹介で、タール寺の管理部門の責任者の高僧からハタによる歓迎を受けて、記念写真を撮った。

高山医学研究所表敬訪問、シンポジウム前会議その後、青海大学高山医学研究所を表敬訪問し、格日力副



学長の現在の研究の説明を受けた。高地チベット人での低酸素抵抗性の新規遺伝子発見の論文が **Science** に掲載され、次は **Nature** に論文を出したいと云った勢いのある研究の進行状況であった。

青海大学高山医学研究所のセミナー室で、シンポジウム前会議を実施し、1) 次回の開催について、日本（東京）での開催を検討している旨を説明し、2) 日中間での病理学の交流に関する意見交換を行った。

格日力先生のマンションのリビングで：その後、蓮井と佐藤榮一夫婦が、格日力・和倫高娃夫婦の自宅マンションに招待された。格日力先生は、この一連の高山医学研究の業績に対して、中国政府がマンションと運転手付き車2台を贈ってくれたそうである。松山らは、夕食時に、高橋潔熊本大学名誉教授から、日本のリンパ網内系の研究50年についての彼の著書に関する説明を拝聴したという。



第6回国際分子病理学シンポジウムと懇親会

第6回国際分子病理学シンポジウム8月20日は、第6回国際分子病理学シンポジウムが、軍交大廈（紅衛兵関連施設内のホテル）の会議室で開催された。

青海大学医学院院長（Duputy director Xu LS）の挨拶で始まり、格日力先生が中国側副会長として、蓮井和久が日本側会長として挨拶し、青海大学の呉教授（Prof. Wu Y）と中国医科大学の韓教授の司会で日中の参加者の紹介が行われ、記念写真撮影を行った。





その後、学術部門の発表を行い、松山隆美の講演を含む4特別講演、蓮井和久の講演と座長、佐藤榮一の座長を含む4一般口演を行い、参加者は、18名の Active participants を加えて、37名余りの参加であった。

最終参加者リスト

氏名 (English)	所属	職名等
Japan-side		
1 Eiichi Sato	Kagoshima Univ. (鹿児島大学)	Professor
2 Yuriko Sato	Kagoshima Univ. (鹿児島大学)	Associated person
3 Takami Matsuyama	Kagoshima Univ. (鹿児島大学)	Dean, Professor
4 Kazuhisa Hasui	Kagoshima Univ. (鹿児島大学)	Assistant Professor
5 Teruhiko Okumura	Kagoshima Seikyo Hosp. (鹿児島生協病院)	Dr.
6 Kiyoshi Takahashi	Kumamoto Univ. (熊本大学)	Professor
7 Granddaughter of Takahashi K.	Kumamoto Univ. (熊本大学)	Associated person
8 Yoshimichi Ueda	Kanazawa Med. Univ. (金沢医科大学)	Professor
9 Daughter of Ueda Y.	Kanazawa Med. Univ. (金沢医科大学)	Associated person
10 Miyako Shimazaki	Kanazawa Med. Univ. (金沢医科大学)	Research Associate
China-side		
1 Yuchen Han	China Med. Univ. (中国医科大学)	Professor
2 Yifu Guan	China Med. Univ. (中国医科大学)	Professor
3 Jiafeng Yang	China Med. Univ. (中国医科大学)	Associated person
4 Ling zhang	Shenyang Med. College (瀋陽医科大学)	Professor

5	Rili Ge	Qinghai Univ. (青海大学)	Vice President
6	Liansheng Xu	Qinghai Univ. (青海大学)	Deputy Director
7	Lan Chang	Qinghai Univ. (青海大学)	Professor
8	Yue Wu	Qinghai Univ. (青海大学)	Associate Professor
9	Yingzhong Yang	Qinghai Univ. (青海大学)	Associate Professor
10	Rueiping Qi	Qinghai Univ. (青海大学)	Office Administrator
11	Hong Yin	Qinghai Med. College (青海医科大学)	Associate professor
12	Juxiang He	Qinghai Med. College (青海医科大学)	Associate professor
13	Juying Li	Qinghai Med. College (青海医科大学)	Associate professor
14	Haiyan Wang	Qinghai Med. College (青海医科大学)	Lecturer
15	Guoquan Jing	Qinghai Med. College (青海医科大学)	Lecturer
16	Hong Liang	Qinghai Med. College (青海医科大学)	Lecturer
17	Yifan Wang	Qinghai Med. College (青海医科大学)	Post Graduate
18	Jianxin Zhao	Qinghai Med. College (青海医科大学)	Post Graduate
19	Meng Meng	Qinghai Med. College (青海医科大学)	Post Graduate
20	Zhichao Feng	Qinghai Med. College (青海医科大学)	Dr Candidate
21	Bing Yang	Qinghai Med. College (青海医科大学)	Dr Candidate
22	Jianjia Shu	Guangxi Med. Univ. (広西チワン自治区医科大学)	Professor
23	Chao Ou	Guangxi Med. Univ. (広西チワン自治区医科大学)	Assistant professor
24	Xudong Chen	Nantong Tumor Hospital (南通腫瘍病院)	Associate chief physician
25	Chunxun Li	Nantong Tumor Hospital (南通腫瘍病院)	Attending physician
26	Luming Zhou	Univ. of Utah (ユタ大学)	Professor

シンポジウムプログラム

Special lectures

1. Matsuyama T. (Kagoshima Univ. Japan): The pathological role of folate receptor beta-expressing macrophages in inflammatory diseases and cancers. Chaired by Takahashi K (Kumamoto Univ.)
2. Zhou L. (Univ. of Utah, USA): High-resolution DNA melting analysis in clinical research and diagnosis. Chaired by Matsuyama T. (Kagoshima Univ.)
3. Guan Y. (China Med. Univ.): Potential application of LNA to gene expression regulation. Chaired by Sato E. (Kagoshima Univ.)
4. Ueda Y (Kanazawa Med. Univ.): Relationship of aquaporin 1, 3 and 5 expression in lung cancer cells to cellular differentiation, invasive growth and metastasis potential. Chaired by Ge L (Qinghai Univ.)

Lectures

5. Hasui K. (Kagoshima Univ.): Immunohistochemical analysis of oxidative modified DNA (8-OHdG) in Chinese nasopharyngeal lymphomas Chaired by Han Y. (China Med. Univ.)
6. Wang H. (Qinghai Univ.): Study on cartilage induced with adipo-mesenchymal stem cells. Chaired by Hasui K. (Kagoshima Univ.)

7. Han Y. (China Med. Univ.): EHMT1 interact with MT1h and regulate histone H3K9 methylation to inhibit proliferation and movement. Chaired by Hasui K. (Kagoshima Univ.)
8. Shimasaki M. (Kanazawa Med. Univ.): Involvement of aquaporin 1 and 5 in metastasis potential of human osteosarcoma. Chaired by Ueda Y (Kanazawa Med. Univ.)



第6回国際分子病理学シンポジウム懇親会

夜は、近くのホテルにて、格日力副学長の主催する懇親会が行われた。多くの民族舞踊にて盛り上がり、日本からの

面々も“ふるさと”を熱唱した。また、格日力先生のモンゴル語と中国語での草原の歌は、圧巻であった。



日月亭と青海湖

8月21日は、和倫高娃先生と酸素療法の先生を加えた日本側として、日月亭と青海湖を視察した。この時に、和倫高娃先生から、青海省では、チベット族が多く、次で漢族、そして、夫婦の属するモンゴル族は2万人足らずであることや、高地での対応方法、青蔵鉄道建設における高山医学研究所を主体とした健康管理下で、建設労働者に高山病での死者は無かったこと等の話を伺った。

日月亭日月亭は、中国側からは、唐の文成公主の唐への別れの地として知られるが、その時代の唐（中国）と吐番（とばん、チベット）の国境線であ

り、伴者が唐の兵士から吐番の兵士に変わった地点と云うことであるそうである。この峠は、ラサ（海拔 3650m）よりは低い、海拔 3520m であり、かなり、慎重にゆっくりした歩みで、日亭に上った。現在でも、西寧側とその反対側では草原にも違いがあるようである。周囲に青蔵高原が広がり、遠方に万年雪を持つ峰々を見た。日亭側から月亭側を望むと、遠方の稜線に古の国境があったのかと実感される趣であった。

青海湖その後、青海湖(海拔 3260 m)を訪ねた。船で中央部（151 漁場）まで行き、写真を撮り、帰って来た。高地への順化が非常に大切であることを体感した。また、青海湖は、元々、淡水湖であったが、そこから流出する河川がなく、流入物により塩水化したそうである。水分は蒸発するが、その他のものは湖底に蓄積するか、水に解けて存在することになる。この自然系の連鎖（自然汚染の歴史）を湖底の地質や水質で知ることができるのかと思った。



その後、西寧でのトルコ石が有名であると云う宝飾工場と特産の肉製品の加工工場を視察した。

西寧市街地、南山寺

夕食後、スルーガイドのトウさんにタクシーをチャーターして貫い、松山、奥村、蓮井で、南山公園で西寧の市街地の写真を撮った。後で聞くと、西寧の夜景が有名な所で、夜のデートスポットだったそうである。その後、南山寺の山門を見て、ホテルの西寧青海賓館に戻った。



帰路（北京へ）

スルーガイドのトウさんとキさん（西寧空港のチェックインカウンターで

8月22日は、のんびりと起床し、11:05 発 CA1208 便で和倫高娃先生に見送られて出発し北京空港に13:30 に到着した。

胡同の四合院住宅

到着後、胡同の四合院住宅を見学した。当初の希望は四合院ホテルかレストランで、お茶（コーヒーとケーキ）でのんびりするつもりであったが、本当の四合院住宅の見学に終わった。しかし、輪タクでの心地よい風は良かった。



天安門広場を經由する時に、待ち合わせ地点の曖昧さで、1時間ほどの広場中での迷走を経験した。その疲れからも、北京ダック専門店での冷たいビールと食事がいっそう



美味しく感じられた。そして、日本側の解散式を行い、次回の参加を願った。

その後、北京マリオット・シティ・ウォールにチェックインした。ロビーで、旅行社の中村清吾氏と再会し、旅行の無事を確認しあった。

帰国

8月23日は、5時起きで、急ぎのホテルでの朝食後に、北京空港に向かった。我々は、大連までが国内線扱いで、国内線出発ロビーへ、上田先生一向は関西空港向けの国際線出発ロビーに進み、ここでお別れした。8:55発のCA953便（大連経由）で、福岡空港に14:10に到着し、帰国した。3時過ぎにリレーつばめ・新幹線にて、午後6時頃に鹿児島中央駅に到着した。

後記

青海大学高山医学研究所を表敬訪問していると、ラサ医学院の方が格日力先生を訪ねて来た。来年8月に、アジア太平洋高山医学会（会長：格日力）を開催することが決まったそうだ。

ラサ／チベット高原を訪ねるには、まず、高山病対策は必須である。一つのプランは、西寧で3日体をならし、青蔵鉄道で24時間かけて、海拔5000mの峠を超えて、海拔3600～3700mのラサを訪ねると、まず、高山病の心配はないとのことでした。ラサ／チベット旅行を計画する時には、参考にして下さい！

2010.9.4-5 に開催された日本組織細胞化学会に参加して来た。丁度、宮崎大の菅沼龍夫学長と飲む機会があり、宮崎大学と青海大学の農学部と医学部間での交流協定の話伺った。丁度、昨年夏に、その交流協定の延長に際して、緊急の参加要請があり、西寧を訪ねたそうである。青海大学農学部の実習農場が青海湖畔にあり、西寧の視察を含めて、青海湖賓館にも宿泊したそうである。やはり、私のお土産にしたやく（ウシ）の干し肉にまつわる酪農や食品加工は重要な共同研究テーマであるようだ。